刈屋さんちの安心野菜

―第二号あいさつ―

太平洋高気圧とともに刈屋家に夏を連れてきた20名の若者が去ると、急に秋が顔をのぞかせ始めました。７月の上旬よりＦ／ｓｔｙｌｅのお２人からご紹介いただいた新潟市古町のむすびや百さん９月中旬からはｍａｒｉｌｏｕさんの店頭にて、毎週水曜日に野菜を販売させていただいています。最初のうちは夏野菜の生育が遅れてしまい、毎週毎週ピーマン、ピーマン、シシトウ、シシトウ…といった具合で特定の野菜ばかり多く集まっていたものの、夏が本格化してからはトマト、ナス、オクラ、枝豆、トウモロコシ…と収穫物も増え、なんとか「一人八百屋」として格好がつくようになってきました。いつもお世話になっている皆様へこの場を借りてお礼申し上げます。またこの夏、畑改善のために惜しみなくマンパワーを貸してくれた若者諸君、改めてありがとうございました。おかげさまで秋野菜の植え付けができるようになり、この秋は春‐夏シーズン以上の収穫を期待することができそうです。次は実りの季節に再訪をお待ちしております。（兄）

八百屋新聞

第二号

刈屋さんちの
安心野菜

〒940-0145
新潟県長岡市
栃堀 2885-6

電話 /FAX
0258-89-7689

E-mail
kariya.br@gmail.com

ブログ
http://blog.livedoor.jp/kariyabr/

ツイッター
kariyabr

《日々是耕日》

―大根水没―

忘れていた。ここは、田んぼだったんだ。雪解けから晴天が続き、土が乾き、草花が一斉に咲き乱れる空気に、その陽気さに頭の中は完璧にボケていた。大根の播種、発芽、間引き…順調だった。なんだ、1年目でも上手く育ってくれるんだ。と、たかをくくっていた。しかし、梅雨。3日続けて雨が降った。そこは畑ではなく田んぼ。大根はほぼ全員水没。大根は息ができずに腐っていくしかなかった。せめて畝を立ててやれば。しかし、全部後の祭り。すまん！（弟）

―第一回交流会―

8月20日栃尾地域でお世話になっている人、近所の人、畑がお隣同士の人たち17名を刈屋家に招待して第1回目の交流会を開催した。当日は家族や滞在中だった伏木、森蔵の両青年の協力も得て会場を設営、料理の準備をした。夕方6時になって参加者が自慢の料理をもって集まると、早速乾杯！初対面の人が多い中、はじめは緊張があったものの、お酒の力もあって徐々に打ち解けだす。自己紹介も兼ねて1人1言ずついただく。「雪掘りの仕事を手伝ってほしい」「農業は年の功」「地元のお年寄りから学ぼう」「新しい風を栃尾に吹き込んでほしい」…。時間はあっという間に過ぎ、宴酣の中、締めとなった。次回は秋野菜のおいしい11月頃に開催予定だ。（兄）

―わけぇもんがやってきた―

この夏、刈屋兄弟の友人を中心に多くの若者が栃掘を訪れた。

野菜の植え付けや収穫、おいしい食事、都市では経験できないようなのんびりとした暮らし・・。様々な期待を胸に訪れた彼らを待っていたのは、7月末の水害で崩れた土砂の撤去作業と開墾作業だった。農作業というよりは土方の仕事。中には野菜に触れられなかった人もいたとか（笑）。

みんなのおかげで山から見下ろす畑の風景が一変した。スコップによる水路掘りに始まり、鍬で土を耕し、畝立てをし、種まきをする。そのプロセスが計4つの畑で完了した。きつい作業ではあった。汗はとめどなく流れ、肩も炎症を起こした。

しかし機械を通さずほぼ手作業で行ったため、土の状態が直に手に伝わってくる。重く固い粘土質だった土が、みるみる軽くさらさらと乾いた土に変わっていった。足を踏み入れると底なし沼のようにぬかるんでいた畑に今では秋の食卓を彩る野菜たちが芽を出し始めている。刈屋家の「日常」に触れた若者4名を次ページ以降で紹介していきたい。（伏木）

《この夏の刈屋家訪問者》

佐藤愛実、伏木洋平、飯田唯、森田曜光、山川志典、昭和女子大生、尾辺昭彦、大澤佑美、昆野正照、坂東倭、船津優、佐藤悠、金耕渉、吉田聖、関口未央、織田和徳、瀬尾友美子、渡辺嶺也（敬称略）

尾辺 昭彦（おべっち）

おべっちへ。長岡駅から栃尾行きのバスを探して、バス会社の社員に「担当じゃないから。」と冷たくされた、あなた。栃尾のバス停で図々しくもケータイの充電をさせてもらった、あなた。タクシーに乗り何も知らず「忠左エ門まで。」と言い「荒木幸男（祖父ちゃんの名前）元気か？」と問われ「知りません」と誠実に答えた、あなた。女子大生との交流会と聞いて会場についてみたら、おじさんばっかりでびっくりしながらも、オードブルを平らげた、あなた。毎晩オベ式マッサージを施術してくれた、あなた。

そんなあなたをみんな慕っています。また会いましょう。（弟）

大澤 佑美

「わたし胴が長いんです」。スタイル抜群、数多くの失言、ハレンチな風貌。刈屋さんちの畑に立つギャル大澤さんの光景は異様であった。しかし話をしてみると将来への夢、悩みを口にする繊細な女性だった。安心した。化粧をしない方が美人だった。まず、彼女の料理はどれも絶品。鯨汁、カボチャのケーキ。味もさることながら、その日の作業を終え、クタクタになって家に帰った時に交わす「ただいま」「おかえり」の何気ないやりとり。そして家の中から漂う夕飯の香り。「これだ！」刈屋さんちに今後なくてはならない大切なワンピースを垣間見た気がした。（伏木）

金 耕渉（ソプ）

「日本に帰って来て幻滅した」。事前に刈屋兄弟に伝わっていたソプの情報はほとんど間違っていた。ここを訪れる全ての人に共通することだが、それまで拾い上げきれなかったその人の魅力、人柄が刈屋家ではありありと見えてくる。特にソプは以前からコミュニケーション能力は高いと思っていたが、見識の深さ、何事にも丁寧に取り組む姿勢、生き方・・。どれもがお手本そのものだった。最後に彼が残していった言葉を紹介します。『一品の料理はそれを煮込む時間だけでなく、畑が使える土地になる段階から収穫、流通まで相当長い時間や手間がかかるということをやっと少し理解できました』。（伏木）

瀬尾 友美子

映画『コクリコ坂から』を見てヒロインのメルに萌えた翌日、シータが舞い降りた。瀬尾さんは明朗快活な人で、常に周りに笑顔を咲かせる。そんな彼女の真骨頂が発揮されたのは台所。とにかく料理が上手い。中でも本場タイ仕込みのグリーンカレー、トマトパスタはこの夏最高の1品であった。ただ料理が上手いだけではない、とても丁寧なのだ。1つ1つの下ごしらえに工夫がある、スピードもある。料理も「何を作るか」ではなく、「どんな食材が使えるか」によって決める。料理当番から外れた際には、洗面台、お風呂、トイレまで掃除してくれるデキ女ぶり。あなたが私たちのシータです。（兄）

《晴耕雨読～今号の1篇～》

―きょうというひ―

みおさんは信じている
くたびれたオーブンと、店先にひっそりと掲げられた旗が、もうひとつの世界への案内板

みおさんは信じている
淹れたてのコーヒーの香りと、焼きたてのパンの香り、鳥のさえずりと、直太朗のTシャツが私を誘ってくれる

みおさんは信じている
「お金はいいから」と袋いっぱいにパンを詰め実の付かないゴーヤに水をあげる立ち姿、目に見えないものもあるんじゃない、と

みおさんは信じている
いつか私も君も、その隣の君も、なんにもなくても、きょうというひに、笑い合っている姿を
なにはともあれ、今日はなんだかいい日だねってな風に、きょうというひに
今日もまた朝顔が咲いている
と、私は信じている　（弟）

撮影：関口未央

【編集後記】

「夏の終わり」この夏に幾度となく聞いた歌だ。栃堀では夏の終わりを告げるかのように肌寒くなり、雨がしとしと降っている。この数カ月で刈屋兄弟を取り巻く環境もずいぶん変わってきた。近年刈屋兄弟の祖父は家にこもることが多かったらしいが、最近では畑を見物に出るようになった。話の中身も変わった。以前は昔を懐かしむ発言が目立ったが、「わけぇもんが入れば村は変わる」といった前向きな言葉が聞かれるようになった。一つ、また一つ季節が過ぎ去るごとに刈屋兄弟の後ろには新たな足跡が刻まれ、前には新たな道が拓けていくのだろう。今後ともご支援よろしくお願い致します。（伏木）